

北上川のほとりの啄木歌碑、岩手山が見える。

やわらかに柳あをめる北上の
岸辺目に見ゆ泣けとことくに

渋民への道

— 啄木のふるさとを訪ねる —

山 本 秀 男

1 去年の初夏をおもいだしています。

実は一昨日、むかし同じ教室で文学を学んだ連中と久しぶりに飲んだのです。うま卒業できたものも、できなかったものも一様に今もつて文学に執着をもっているのですから、似たもの同士の集りといえるでしょう。とにかく話題が一致しているものですから、懐しさも手伝つて随分飲んだような気がします。多分そのせいでしよう。啄木のふるさとを訪ねたときの印象が、妙に鮮やかによみがえってくるのです。

もちろん半年以上も前のことで、どこにどんな家があり、どこに櫓があつたかは、さだかではありません。こまかいことは殆ど忘れてしまったといつた方がいかもしれません。ですが、それだけに渋民への道の雰囲気、そして渋民の悲しい印象が、私を初夏のおもいでに連れもどすのだと思います。

2

六月のなかばでした。

私は自販車を小口混載急行便で、あらかじめ盛岡駅へと送っておきました。盛岡での仕事が終わったら走ろうという魂胆があつたからです。心配していた天気も、梅雨期に入っているというのに、毎日／＼晴れわたつて、空は美しい青さで輝やいていました。思えば私が岩手県に行つたころは、東北でも一番よい季節ではなかつたのでしようか。

東北本線は蒸気機関車です。ポツポツと煙を吐いて走っています。それだけでも子供みたいに嬉しくてならなかつたのですが、花巻をすぎ盛岡が近くなるにつれ、どうしても神妙に座席に坐つていることができなくなりました。岩手山を車窓にみつけなければならなかつたからです。

汽車の窓
はるかに北にふるさとの山見えくれば
襟を正すも

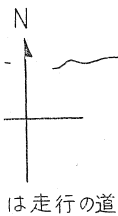
啄木のこの歌が私の頭を占領していたのです。当時の汽車は、きつとこのろのろと走つたのでしよう。長い長い汽車の旅の末にようやくふるさとの山をみつける。その時

森

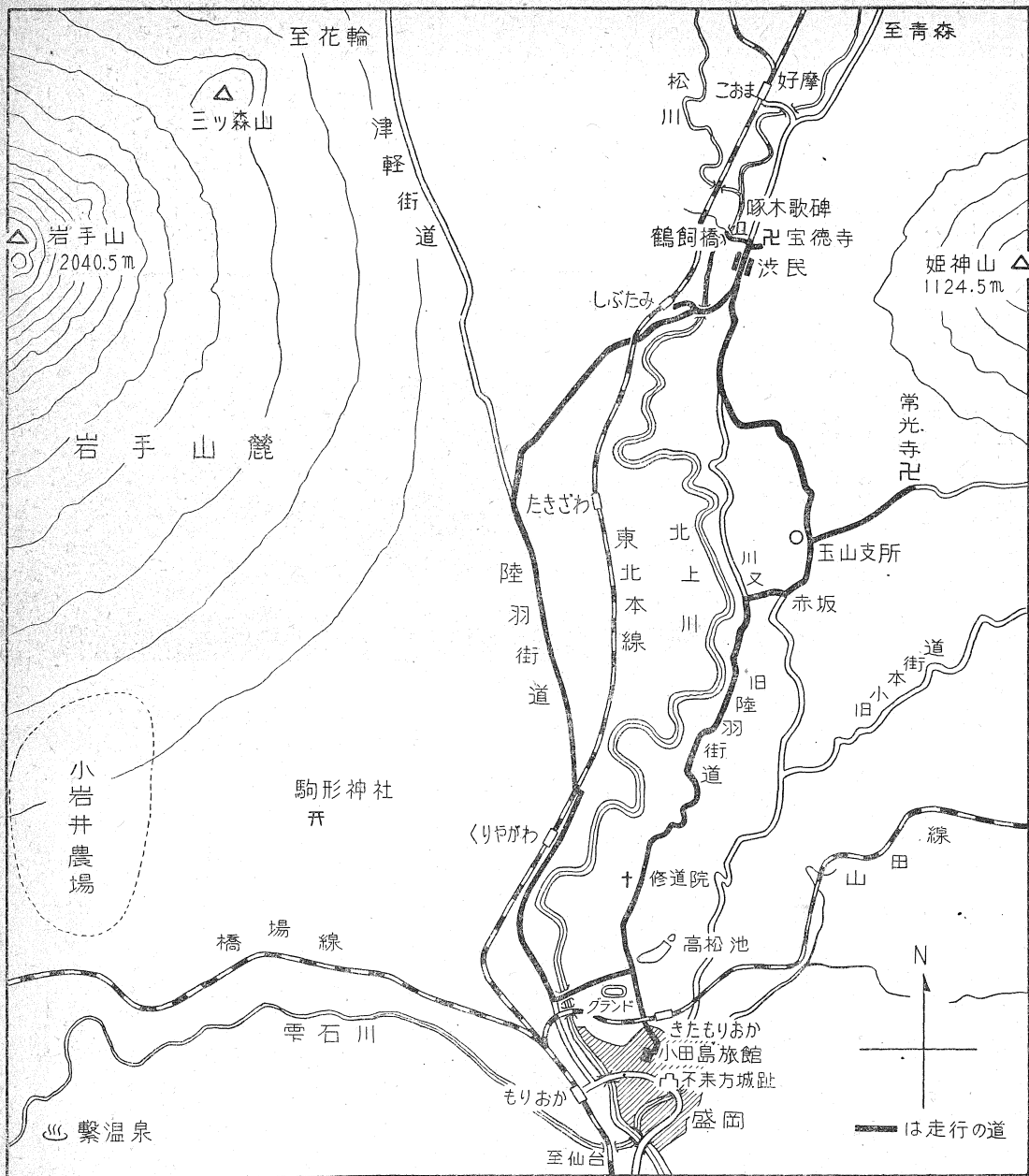
姫神山 △
124.5 m

道

線



の啄木の気持にかねてから深い共感をもつていました。啄木が襟を正さずにはいられなかつたその山を、私はみたくてなりませんでした。かつて、この東北本線は北海道旅行のために二往復しましたが、いつも



六月のなかばでした。

つたのでしよう。長い長い汽車の旅の末に
ようやくふるさとの山をみつめる。その時

の啄木の気持にかねてから深い共感をもつ
ていた私です。啄木が襟を正さずにはいら
れなかつたその山を、私はみたくてなりま
せんでした。かつて、この東北本線は北海
道旅行のために二往復しましたが、いつも
夜行のため、ついに岩手山をみることで
きなかつたのです。思えば十数年来の宿願
が、すぐ目の前で達せられようとしている
のです。

「オ母サン、アレ、イワテサン」

と反対側の席で子供が窓の外を指さしま
した。私はびっくりしました。岩手ヤマだ
と思つていたので。子供は、はつきりイ
ワテサンと呼んでいるではありませんか。
お母さんは「そよよ。イワテさんよ」と答
えました。どうみても東京に住まつている
人のようですが、きつと盛岡か、その近在
をふるさととする人でしょう。そのイワテ
サンという語感が実にさわやかに感じられ
るのです。啄木に襟を正させたのは、やは
りイワテヤマでなく、イワテサンでなけれ
ばならないと一瞬のうちに納得しました。
そして反対側の席の母子に、ひそかに感謝
したことでした。

岩手山は車窓一ぱいに大きな姿を現わし
ました。それだけではありません。多分空
気が違うのでしよう。一口に真赤だとい
うには勿体なさすぎるような、美しい夕焼
です。それはそれは複雑な赤さの夕焼なの
です。その夕焼空に東側のかかり急な斜面を
美しく画いて、シルエツトになっているの
が岩手山なのです。荘厳というべきではし

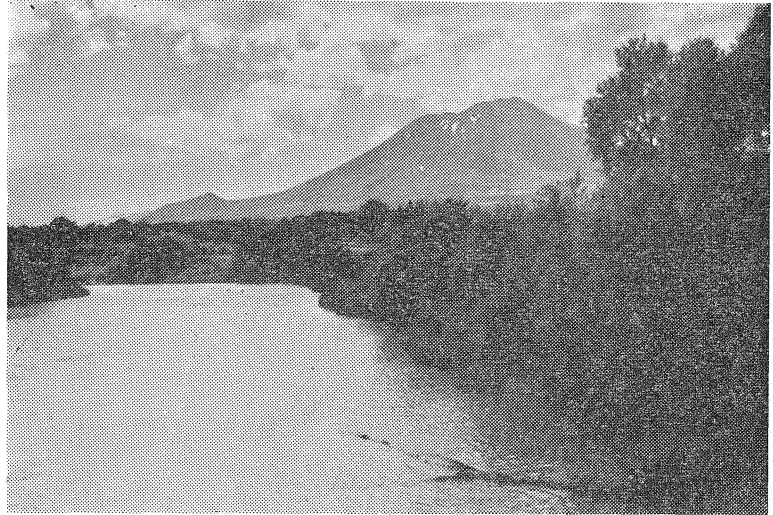
うか。私は自分で満足する言葉を見つけて出せないままに襟を正す気持になりました。そして夕焼空が、しずかに暗くなるのを見ていました。

このときです。どうしても渋民へいかなくはならないと決心したのは――。

3

盛岡の藤村博君という若いサイクリストが、わざわざ渋民への案内を買ってくれました。彼はCFCの会員ですがこの地方ではきつと珍しいだろうと思われる、クラブマンエースに乗ってきました。でもタイヤは一対時をつけています。前の日も私は盛岡サイクリング・クラブの人達について、駒形神社の「チャグチャグ馬つ子」というお祭りを

見にゆき、小岩井農場までいきましたが、一対時の車をもつてこなくて良かったと思えました。この辺の道は、あまり良くないのです。やはりクラブマンエースでもタイヤは一対時が常識だろうと思つていたところ



鶴岡橋から見る岩手山、川は北上川

私の気分こそぐわなと思つたからです。それに私の経験では田舎の国道は、サイクリングには向かないと考えていますし、わざわざ土地の人が案内してくれるのに、真直走れば事足りる国道を選ぶ手もないと思つたわけです。ですから、国道の方が楽だという盛岡の人々の忠告にも、なにか悪い気がしましたが帰りに通ることにして、往きはあえて従わないことにしました。

盛岡は南部侯の城下町です。その翌日には藤森君と二人で一日中歩きまわりましたが、たいへん人懐こい表情をした町です。そして青春時代を過すにふさわしいロマンの香りが漂う町です。四ツ家町から左へ折れば旧陸羽街道になりますが、しばらくは下町のような感じの家並が続きます。でもやはり城下町らしく、永い歴史を秘めた住居の臭いが、細い道一ぱいに匂い出してくるような感じでした。

左に総合グラウンドを見、右にスケートで有名な高松池を見送りますと、小さな登りになり、舗装も切れて郊外へ出てしまします。郊外といつても東京のそれとは大変に違つており、山間の部落へ入りつつあるといつた方が本当かも知れません。修道院の前を過ぎる頃は、もう全く山間の道といった方がいくらい、風景が変つて、また、いくら自転車で走つているとはいえ、あまりにも早い風景の変化には驚かざるを得ませんでした。それというのも、盛岡の町があまりにも美しく立派だから余計に感ずるのかも知れません。

道はどこまでいつても、そんなにひどくはなりません。トラックが通るには都合が悪いのかも知れませんが、自転車でいく私たちがとつては適当な屈折があり、登り下りがあり、なによりも木々の若葉も雑草も埃をかぶつていないことが素晴らしく思えたことでした。ときどき岩手山が姿をあらわしますが、丁度東京近辺でいえば都築丘陵の道を行つているときのように、凸凹な地形なために、すぐ山は見えなくなるので

どのぐらい走つたでしょうか。小さな物見櫓が右側にありました。丸木で作つた粗末なものでした。私たちは車をとめてしまいました。そして、ぐらぐら揺れるのを恐ろしいと思ひながら上に登つてみました。この辺は丘がいくんでいて、おまけに道がくねくね曲つているので見晴しの悪い所ですが、この櫓に登つてみると、盛岡の方も岩手山も一望できるのです。私は昔の旅人を想像しました。人の踏みかためた草の中の道を探り、方角が不安になると高みへ登るといふ話です。おそらくこの物見櫓はそのため建てたものではないと思ひますが、それにしても、見晴しのきく所へ登つてみなければならぬことが何かあるのでしょう。そうでなければ誰も櫓を立てずまい。ところで私はもう一つの山をみるように藤森君に注意されました。それは南昌山といつて、南の方わずかに西寄りの山ですが、盛岡の人々が天気を知らるのに重要な山だそう。頂に雲がかかれば雨になり雲

がなければ晴になるといわれています。単純なことのようにですが、永い間の観察によ

農家も、森も鳥も、みんな非常に低い位置にへばりついてしまつたのではないかといい昔電二宿入るのです。或いは普遍性

5

るほどに若葉の臭いがむせかえるように漂つてくるのです。

たが、かわいそうだと思つて、皆の中へ連れていつてやりましたが、一番隅ついで立っていました。人一倍ふるさとを愛し、しかも村の人々に追われなければならない

がなければ晴になるといわれています。単純なことのようですが、永い間の観察によつて、その山の変化と天候の変化とが一致することを発見したのでしよう。この櫓もそのために作られたかも知れませんが、それはあくまで私の憶測であることは云うまでもありません。とにかく、その日は素晴らしく晴れていて勿論南昌山にも雲はかかっています。

4

さんさんと降り注ぐ、そういつても間違いはあるまいと思えるほど、六月の太陽は惜しみなく地上に光を降りそそいでいました。まだすつかりは青くなりきれないような東北の六月ですが、木も草も若い生命を燃やしているさかりのようです。

どこからか郭公の啼く声が聞えてきます。櫓があるといつては車から降り、郭公が啼くといつては車を停めていたのでは、いつになつたら浜民へつくかわかりません。でも、日頃郭公の声をきかない私にとつては、タイヤの音さえ邪魔になるような気がしてなりません。そんなわけで、つい車から降りて、真白な巻煙草を口にくわえるのでした。

それにしても、郭公はなんと美しい声で啼くものでしょう。カツコー、カツコーと字で書いてしまえばそれまでですが、その声は近くのようにも、遠くでもあるような気がする不思議な響をもっています。カツコーの声を聞いてみると、藁葺屋根の

農家も、森も鳥も、みんな非常に低い位置にへばりついてしまつたのではないかと、う錯覚に陥入るのです。或いは普通のな感じ方で、所詮は私だけのものかも知れませんが、それほどにカツコーの声は低い所から水平に、なにもにも妨げられないように澄んだ声を私の耳まで送ってくるのです。実際望遠鏡でその姿をみられたらと、甲斐なきことを悔んだことでした。どうなんでしょう。カツコーは静寂を破り静寂をより静寂にすることを快感としているのではないのでしょうか。そんな勝手な想像を私は楽しんでいました。再び車に乗つても、いく先々、それこそ到る所でカツコー、カツコーと啼く声に慰められたことです。

郭公といえは、啄木にとつてもカツコーカツコーと啼く声は、想い出多きものであつたようです。

閑古鳥

浜民村の山荘をめぐる林のあかつきなつかし

こんな歌を私は覚えてあります。そうです。郭公は夏になると日本に渡つてくる渡鳥なのです。もちろん啄木の歌つた閑古鳥は郭公のことです。

私たちは川又というところで陸羽街道に別れ、常光寺へいくために小さな山を越えて赤坂に入りましたが、藤森君の話によりますと、このぐらゐの山道でも冬は通れないほど雪に埋れてしまふそうです。それに付けても何といひ空でしょう。道が狭ばま

るほどに若葉の臭いがむせかえるように漂つてくるのです。

5

玉山村役場の玉山支所が目安でした。隣りに農協兼雑貨屋があるだけの淋しいところですが、この支所の前の横道に入りますと、まもなく常光寺です。サイクリング車ですから、そんなに急いだつもりはありませんが、村人の教えてくれた時間よりも早く五分もかからなかつたでしょう。

寺は大きな杉の木立を前に、小山を背にして、日当りのよい小さな庭をもつていました。幼な児たちが多勢遊んでいましたが、私が杉の木の前でカメラを構えますと、みんな集つてきて、一本杉の下に並んでしまいました。あまりの可愛さにそのまま幼な子たちを入れてシャッターボタンを押して、こんどは啄木生誕の地と刻んだ石碑に場所を移しますと、また並びます。これには一寸まいりましたが、一人だけカメラの前に並ばない男の子がいます。まだ口もよくきけないほどの幼な児のことですから、どういわけかは私にはわかりませんでし

浜民村の共同井戸



たが、かわいそうだと思つて、皆の中へ連れていつてやりましたが、一番隅つこで孤立していました。人一倍ふるさとを愛し、しかも村の人々に追われなければならなかつた啄木が、この孤立した子供に覗きみられるような気がしましたが、あわててそんな考えを打ちこわしました。

常光寺は啄木の生れた寺だそうです。ところが啄木はほとんどこの寺を懐しんでいないなかつたようですし、啄木研究書を見ま

しても、この土地の人もいまままで啄木をか
えりみてこなかつたようです。ところが、
いまはこの寺の庭の隅に、大きな石碑が建
つていて「啄木生誕の地」と鮮やかに刻ん
であります。私はこの寺を訪ねてみて、石
碑の大きさに反撥を感じましたが、感傷で
しょうか？ お笑いになつても結構です。

本堂は粗末な小さなもので、右手の庫裡
もまたまけず劣らずの粗末さでした。庫裡
の縁側に日向ぼっこをしている乙女が二人
さつきから私たちを見ていました。おそら
くこの乙女たちに聞いても満足な話はきけ
ないと思いましたが、黙つて帰るのも気ま
づく思い、啄木について問うてみました。
ところが一人は何も知りませんでした。も
う一人は、「このお寺で生まれたさうで
す」と答えただけで、あとのことは知りま
せんといつていました。

「あなた方はこの寺の方ですか？」
そんな問いにも首を横にふつて
「保母です」

と答えただけです。よく聞いてみますと
農繁期なので、この寺を臨時保育園にして
いるのだと言葉少なに説明してくれました
が、どういうわけか、だんだん孤独になつ
ていく自分に、気がつかないわけにはいき
ませんでした。啄木の故郷は波民であり、
今では玉川村字波民であつても、啄木の友
は、もつと遠くに散らばつていゝような気
がしてなりませんでした。



啄木が神童の名をほしいまに育つた宝徳寺

ラクターは何のた
めにこんな所を走
つてゐるのだろう
か？ そんな疑問
を持つて藤村君に
訊いてみました。
彼の答えを要約す
ると大体次のよう
なことになるま
す。

この道は下閉井
郡といつて日本の
チベットといわれ
る山奥に通じてい
ますが、その山奥
にダムをたくさん
作つてゐるとのこ
とです。彼は東北
電力の人なので、
いろいろと詳しい
話をしてくれまし
たが、興味のあつ
たことは下閉井郡
という僻地の話で
す。大変なところ
で、先生もそこへ
赴任すると、後任希望者がな
いままに、骨
をうずめるまで働かねばなら
ないことにな
るさうです。そういう己の行先
を悲しんで
自殺した先生もあるとか。日
本の歴史が自
然の条件と為政者の手ぬかり
で、どんなに
ひどいピツコな発展をとげて
いることが、
話を聞いただけでも、ぞつと
することが、
たくさんあるさうです。

そんな話をしながら、いく曲りも道
を曲りながら走つていきますと、岩手山がう
んと近づいてきました。道のむきによつては
姫神山もみえます。啄木が愛してやまな
かつた山々は、いまも岩手は男性的に姫神は
女性的に對称的な姿をみせてゐるのです。
最後の登りを登りつめました。頬かぶりし
て杖をついたお爺さんと、大きな荷を背負
つた中年も半ばすぎた婦人にゆき会いまし
た。なんとこのことのない出会いでした
が、何か啄木の時代に連れもどされたよう
な感じがして写真にとつておきました。

「啄木が前代未聞の学童ストライキを
やつた丘はこのへんじやないでし
ょうか」
藤森君にそんな問いを發しましたが、そ
うらしいですわという程度の答えて、彼も
よく知らないようでした。私たち二人はそ
れでも満足して、代用教員啄木の血のわき
あがる様を想像しながら、足元のスロープ
と岩手山とを眺めていました。

ふるさとに入りて先づ心傷むかな
道広くなり
橋もあたらし

波民の部落へ入つたとき、この歌の実感
が、鋭すぎるほどに私を襲つてきました。
なんと広い道でしょう。啄木の夢にみたふ

るさと波民と、私の勝手なイメージである

おもいで
の川
明朝で誰にでも



眼の下に北上川と鶴飼橋がみえ、前方は岩
手山、后は姫神山がみんな一べんに望める
丘です。

るとと浪民と、私の勝手なイメージである浪民とは決して同じである筈がありません。だのに、この道巾には私も失望せざるを得ませんでした。

南から入りましたので、陸羽街道の坂を登りつめたところが浪民です。家並はそう長くないことは、一直線の道のむこうが、空とくつついていることでもわかります。昔の話に、太名行列というのがありません。絵でも御覧になったことがあるかも知れませんが、「下にい——下にい」と先払いをして大名の行列がいくと、通行する農民、町人は土下坐してこれを除けたそうです。私たちの祖先のこういう悲しい姿に、この浪民の家並がそっくりなのです。べらぼうに広い道の両脇に、二階家でも屋根がふかぶかとかぶつて低くみえる家々が、ベシヤンコなかつこうをしてへばりついているのです。

この道は浪民の意思で拓がった道ではありません。両脇へ払いのけられるようにして、退くのを余儀なくされたのではありません。東京青森を結ぶ国道のために——。おそらく浪民に何らかのイメージを持つ人は、この道の広さに、啄木の歌をあらためて思いだすのではないのでしょうか。

おもいで山

おもいで山

明朝で誰にでも読める石碑ですがその書体が或いは啄木を偲ばせるとするならば、この家並の古さと暗さは、啄木に冷たかつた村人を想い出させてもいるようです。歌碑と部落とのつながりが妙にちぐはぐに思えてなりません。

道端には二つばかり井戸があり、何軒か共同で使うのでしょうか。おんな衆が喋りながらすすぎものをしていました。学童が水を飲んで駆け去りました。この井戸をみると、やつと私は落ち着いてきました。部落の人の呼息にふれているという安心感が湧いてくるのです。

ただ、啄木遺跡を案内する白ペンキ塗の導標は、妙にそらそらしくて一々入つていく気になりませんでした。町をゆつくり走り、そして雑貨屋でパンとカン詰を買つて



啄木誕生の寺常德寺、今は臨時保育園になつている

眼の下に北上川と鶴飼橋がみえ、前方は岩手山、后は姫神山がみんないへんに望める丘です。

やわらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

随分大きな歌碑です。歌を刻んだ部分は滑らかに長方形に凹んでいて、そこに「やわらかに柳あをめる——」と明朝体で彫られています。やや西向に立つ碑です。六月の太陽は高く、そして真上にきていたので字だけが深く陰になつていて、歌碑を一層美しいものにしていました。

私たちは歌碑の前の小さな松の下に日影を求めて、握り飯やらパンやら牛の大豆煮の缶詰などを掲げて食事しました。藤森君は野球の試合のために浪民へ来たことがありますという話をしていました。握り飯をかじりながら眼を下におろしますと、北上川が、それはひどく濁つて流れていました。ここまで来る道で、たしか川又の手前でしたが、やはりひどく濁つた北上の流れをみました。それは異様な感じの茶褐色の流れです。

「これは松尾鉾山の鉾毒のために濁っているのです。ここから一寸先に、北上の支流で松川という川が入ってくるのですが、その松川の上流に鉾山があります。ですから、好摩までいけば北上は美しい流れになります」

藤森君はそういいながら、私に岸辺に覆いかぶさるようにして生い繁つていくたく



洪民の家並、杜陵の北五里、風景以外見るべきものなしと啄木は云っている

の葉に初夏の太陽を浴びて、しらじらと光つていました。

「あの柳もだんくんと枯れて死んでいくそうです。鉱毒の濁流に根つこを洗われてるからです。柳に巢を作つていた小鳥もやはりだんだんに減つてしまつて今ではほとんど影をひそめています」

そんな話のいくつかを聞いていますと、ひとのふるさとのことではありませんが、非常に悲しい気持になりました。

北上川にかかる吊橋におりてみました。鶴飼橋というロマチックな名前です。家に帰つてから改造社版の石川啄木全集を開いてみたら「鶴飼橋に立ちて」という詩を見つけました。啄木に鶴飼橋を聞いてみましょう。彼はその詩の序に次のようにいつております。

さんの木を指さしました。「あれが柳です」私は一寸の間キョトンとしていました。恥しいことですが柳は銀座のしだれ柳しか知らなかつたのです。目の下の北上の岸辺の柳は、白つばい緑

せめて「しぶたみ」と墨で鮮やかに書かれた駅でもみてこようと、北上川を渡つて、曳尾沢へと登つていきました。啄木のころ

「橋はわがふる里洪民の村、北上の流に架したる吊橋なり。岩手山の眺望を以て郷人賞し措かず。春暁夏暮いつをといつとも別ち難き趣あれど、我は殊更に月ある夜を好み、友を訪うてのかへるさなど、幾度かここに低回微吟の興を壇にしけむ。」

私も、ここからみる岩手山が、そして姫神山が一番いい気がつきましたが、それにつけても、こういう美しいふる里にこののできなかつた啄木が、かわいそうでならなくなりました。もちろん彼のすべてを私は肯定するわけではありません。いわば啄木によつて一方的に聞いてきた洪民村で、当時の村人の云い分を聞くすべがありません。それでもなお啄木は哀れにおもえてなりません。北上の岸辺はそんなことを訪う人ごとに訴えているのではないでしょうか。

「橋はわがふる里洪民の村、北上の流に架したる吊橋なり。岩手山の眺望を以て郷人賞し措かず。春暁夏暮いつをといつとも別ち難き趣あれど、我は殊更に月ある夜を好み、友を訪うてのかへるさなど、幾度かここに低回微吟の興を壇にしけむ。」

私たちが宝徳寺に入ったとき、その殺風景なことに驚きました。庫裡の修理をしてるようでしたが、なにも殺風景だと思わせるのは、立派な杉の木が、随分伐り倒されていたことです。昔、啄木が東京へ飛び出して病を得たとき、父に迎えにきてもらったことがありますが、その時父一禎は旅費にするため、壇家に無断で杉の木を数本切つて売つてしまつたそうです。あの有名な校長排斥の学董ストライキを指導したことも大きな理由には違いありませんが、壇家に無断で木を切つて売つたことも、啄木一家を洪民に安住させない大きな理由であつたと聞いています。

9

自転車をもととして宝徳寺へ廻つてみました。この寺は啄木の育つた家でした。常光寺は彼にとつて想い出の家ではなかつたようですが、この寺には随分想出も多かつたと思います。

むざんに伐り倒された杉の木は、そんな話をわざわざ思い起させて惨酷でした。もつとも、啄木が代用教員だつたころの手紙によりますと、前年凶作のため給料も役場から来ないということがあつたそうです。当時は村全体が非常に貧しかつたのは事実のようです。壇家に無断で木を売つた一禎も余儀なくやつたことも知れませんが、村人も貧しければ殊更に一禎をさがめたくも知れません。

そのかみの神童の名のふるさとに来て泣くはそのこと

隣の保育園の前を通つて池にゆきました。この池が、昔啄木が遊んだという寺前の池かどうかは、たしかめてみませんでしたが、そのころには洪民をひきあげようと

こんないくつかの歌を想い出しますが、洪民の駅から盛岡までは、陸羽街道をまつく、それこそ逃げるように走つたこと

使用自転車 ロイヤル・ノートン・ク ラウン。二六吋×一⅜吋ホイール。オ ールラングラー型ハンドル。四六T×F Vハブギヤ(十八T)

いう気になつていました。白ペンキの啄木遺跡の導標のいくつかを無視しても帰つたくなつていたので。浜民はあまりにも悲し気な表情をしすぎているのです。或いは啄木に同情しすぎたために、そう思えるのかも知れませんが、山が美しければ美しいほど、このだたつびろい道の浜民は妙にちぐはぐな感じかしてくるのをどうしようもありませんでした。

部落のなかで僅かに活気のある水汲場へよつて水筒に水をつめ、手びしやくで一杯の水を飲みました。学童がこんどは群をなして水汲場にきました。さつきみたときより、もつと活気があつて嬉しかったことです。

10

「浜民村という名はいまではなくなりました。昭和二十九年の町村合併で、玉山村と一緒にしたのですが、そのとき浜民が負けて玉山という名になつてしまつたわけです。」

藤森君はペダルをこぎながらそんな話をしてくれました。

「玉山村じや、東京にいたんでは一体どこなのか見当が付きませんね。私だつたら浜民村にした方がいいと思ふけど、そんな考えにはならなかつたものですかねえ」

「そういう主張もあつたそうですが、どういうわけか玉山村に敵わなかつたらしいです。」

せめて「しづたみ」と墨で鮮やかに書かれた駅でもみてこようと、北上川を渡つて、浜民駅へと登つていきました。啄木のころは駅がなく、次の好摩で降りたのですから、浜民は啄木のいうとおり不便なところだつたわけです。駅は姫神山の眺望がよいところでした。駅員に頼んで浜民のスタンプを出してもらい、五万分の一の地図「盛岡」の裏にそれを押ししました。スタンプには啄木歌碑と鶴飼橋と姫神山が刻んでありました。そして「やわらかに柳あおめる北上の岸辺目にみゆ泣けとごとくに 啄木」と書いてありました。

いま思い出すままに盛岡の地図を出しましたので裏がえしてみましたら、浜民駅のスタンプは38.6.16と日附が記されていました。

田も畑も売れて酒のみ

ほろびゆくふるさと人に

心寄する日

石をもて追はるることく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆることなし

ふるさとの土をわが踏めば

何がなしに足軽くなり

心重れり

ふるさとの山に向いて

言うことなし

ふるさとの山はありがたきかな

こんないくつかの歌を思い出しますが、浜民の駅から盛岡までは、陸羽街道をまつすぐ、そこそ逃げるように走つたことでした。(おわり)

使用自転車 ローヤル・ノートン・クラウン。二六吋×一六吋ホイール。オリジナルランダー型ハンドル。四六T×F Wハブギヤ(十八T)

自転車研究会の発足

自転車業界には、技術関係 販売関係 メーカー関係等のいろいろの団体や組合があり、その各々で種々の研究や意見の交換や懇談がいつも行われているが、それ等のいづれにも関係なく、単に自転車の研究をして見たいと云う事で、この会が生れた。即ちメーカー、団体職員、サイクリング団体等の所属を離れて、会員は凡て個人の資格で、会に出席し意見の交換をする事がこの会の目的で、左の人々が集つて第一回の発企人の形をとり、一月二七日今後の方針を検討した。

入会 申込はサイクル時報社内、自転車研究会
発企人 北原利一、長谷川清、宮田実、佐藤一男、鳥山新一、山本秀男、今井彬彦
尚、第一回会合によつて左の事を決定し二月二七日、第二回会合を開く事になつた。

研究題目 一九六〇年型の自転車はどんな構想になるか

これは、今後の自転車の主流となるべき、ライトロードスター、又ライトツーリストを取り上げ、この車種の研究によつて、合理的な自転車の車種別の本来のあり方を、究明するもので、そのフレーム、部品、附属品等を順次研究して行く。

研究題目2 メーカーとユーザーの意見交換

事務所 当分の間、サイクル時報社内
会合 月一回 毎月二七日、末広町久保田鮎店
会費 会合日の食事代の外五〇円程度の通信事務費を徴収
連絡 会員には、議事録を送付する